

## 芸術系大学における情報プラットフォームの構築

「アート&デザイン情報図書館」の実験から

### THE CONSTRUCTION OF INFORMATION PLATFORM AT UNIVERSITY OF ART AND DESIGN The case study on " Art & Design Information Library "

久慈 達也 図書館 研究員

Tatsuya KUJI Library, Researcher

#### 要旨

本稿の目的は、芸術系大学における情報プラットフォーム構築の実践的な研究の場である「アート&デザイン情報図書館」の趣旨と諸機能について詳述することである。変化する現代の情報環境において、オンラインも含めた情報プラットフォームの構築は急務であり、「アート&デザイン情報図書館」は、その一つの回答と位置づけられる。

情報プラットフォームとしての「アート&デザイン情報図書館」は、最新の成果が公開されるメディアとしての展覧会を主たるコンテンツに据え、特別講義や公開講座、さらには関連の専門図書の情報を集約し、広く一般に公開されている。また展覧会、イベント、新製品発表等に関するウェブ上のニュース記事の収集も同時に行われている。図書館の到着図書を表紙画像付きで配信する仕組みや「関西ギャラリーマップ」など実験的な要素を折り込みつつ、「観る」、「聴く」、「読む」のそれぞれの領域において実現された教育支援は、従来の図書館の範囲を大きく超えるとともに、情報の編集を積極的に行うキュラトリアルな実践である。

#### Summary

The purpose of this text is to explain an outline and various functions of " Art & Design Information Library " and its practical research on the information platform construction at a university of art & design. In a changing modern informational environment, construction of information platform including online is a pressing need, and " Art & Design Information Library " is considered as one possible solution.

In this platform which is open to the public, the main content is the information on current exhibitions as they are seen as media reflecting on the latest trend. Additionally, information on special lecture and relevant books are listed. Online news articles concerning exhibitions, events, and new product releases are listed at the same time. A new way of promoting learning has been established through the use of mechanism presenting cover images of newly-arrived books at the university library and the gallery map in Kansai region; the contents achieved in each area of "See", "Listen", and "Read". This platform actively engages with experimental editorial and curatorial practices beyond the scope of conventional library domain.

はじめに

書籍の電子化に大きな進展がみられる。先頃、大英図書館は Google 社と協力して著作権切れの蔵書 25 万冊のデジタル化を進めると発表した<sup>1)</sup>。2011 年 6 月 20 日のことである。デジタル化されたコンテンツは、同館のウェブサイトや Google Book Search で閲覧できるとされている。国内でも、国立国会図書館の蔵書で入手困難な出版物については著作権者の許諾を得ずに電子データを公立図書館や大学図書館に配信する方向で文化庁が検討に入っている<sup>2)</sup>。これは著作権法改正を前提とした動きである。この 2 つの事例は、「電子書籍元年」と呼ばれた 2010 年が、ほとんど電子書籍の閲覧端末シェア競争の様相を呈したのに対し、実のある話題である。この流れが進めば、古い書籍は大半がインターネットを通じて読める時代が来ることになる。その際、大学図書館は膨大な電子情報の受け皿足り得るだろうか。私たちは Google Books を図書館を介さずして使用できるという当たり前の現実を知っている。物理的な場としての図書館の将来像は必ずしも明快ではない。もちろん紙の書籍がこの世から全て無くなるというのも考え難い。そのため図書館はこれまで通り図書館として存在し続けるのであろうが、眼前に立ち表れた膨大な電子情報を取り込むことを抜きにしては、その存在意義は半減する。

本稿は、筆者が「芸術系大学の情報プラットフォーム」として実践研究を行っている「アート&デザイン情報図書館」（<http://infolib.kobe-du.ac.jp/>）の目的と諸機能についての報告であるとともに、図書館の在り方についても示唆することを目指すものである。

「アート&デザイン情報図書館」は、2010 年 10 月から運用開始された情報プラットフォームである。2008 年 12 月に大学発のポータルサイトとして開設された「新図書館ラボ」を前身に持つ。「アート&デザイン情報図書館」は、コンテンツ・マネージメント・システム（以下、CMS）を用いたポータルサイトと、その他のサービスを統合的に利用し構築されている情報複合体である。したがって、本稿において「アート&デザイン情報図書館」という名詞は、二つの意味を指す言葉である。一つは、

CMS を核としたウェブサイトであり、もう一つは、情報プラットフォーム全体としての意味である。本稿においては両者を明確に区別して論じる。

「新図書館ラボ」は、約 1 年半の運営期間の間に、様々な課題を浮かび上がらせた。そこで得られたフィードバックを基に、リニューアルのための作業を 2010 年 4 月から開始した。リニューアルといっても核となる CMS およびサイト名、ドメイン名を変更しているの、厳密に言って、ウェブサイトとしては全くの新設である。しかし、情報プラットフォームの機能実験としてその内容を継続しているために機能更新と捉えている。リニューアルに際しては、筆者がサイト全体の青写真を描き、実際のシステム構築には本学職員の助力を得た。学内の人材を活用したことは、後に述べる運営課題と密接に関わる重要な問題であったことをあらかじめ指摘しておく。

1. 現在の情報環境における図書館と「図書館的なもの」構築作業の内容を解説する前に、ひとまず自分たちが置かれた状況を確認することから始めよう。それによって、オンラインの情報プラットフォームの必要性も理解されるはずである。

冒頭で指摘した大英図書館の事例は、図書館が保有してきた図書資料を電子化するという動きであった。EU 圏の博物館、図書館、音声アーカイブ等が保有する電子情報の統合に力を入れている「ヨーロッパアーナ」も同種の活動と位置づけられる<sup>3)</sup>。対して、ウェブサイト等、始めからインターネット上に生成される情報は、「インターネット・アーカイブ」等の図書館以外の「図書館的なもの」による保存活動が目立つ<sup>4)</sup>。国立国会図書館にしても、2010 年 4 月からようやく公的機関のウェブサイト保存活動を本格的に開始したばかりである<sup>5)</sup>。

ディドロは『百科全書』の趣意書において「技術と学問のあらゆる領域にわたって参照されうる」と謳ったが、現在、その役割を最も体現しているのは、2001 年に誕生した「Wikipedia」であろう<sup>6)</sup>。ディドロらが『百科全書』に求めたものは、あらゆる先進的な知識の集積であって、これまで図書館は書籍の蓄積によって、その身のうちに

『百科全書』的世界を体現してきた。「知識の集積と提供」という目的が制度化された場所、それが近代的な図書館である。

ところが、状況が徐々に変わってきた。とりわけ 1995 年以後、Windows95 の登場によってパーソナル・コンピュータが一気に家庭に普及していく。同時期にインターネットも一般化し始め、2005 年には、いわゆる web2.0 時代へと突入する。時ここに至り、「YouTube」のような動画共有サイト、「Facebook」や「mixi」といったソーシャル・ネットワーキング・サービスによるコミュニケーションを私たちは手に入れた。

現在、「知識」はどこにあるか。それらはもはや書籍の中だけではなく、コンテンツと呼ばれ、ウェブ上、アプリケーション上に存在する。情報の正確さが保証されているならば、書籍に書かれている内容とモニターに表示される内容に、情報の価値としての差を認めることはできないだろう。在るのは情報の「容れ物」の違いのみである。『百科全書』と「Wikipedia」の対照にも暗に示されているが、商業的な「電子書籍元年」を待つまでもなく、電子化された私たちの身体における読書行為は既に成立している。

このことは図書館にとって「現実的な情報の喪失」という一つの深刻な状況をも生み出している。昨今の出版事情の悪化はインターネットによるものばかりではないにせよ、ここ数年の雑誌休刊の多さをいまさら改めて指摘するまでもないだろう。試みに、最近休刊になったデザインおよび美術関係の雑誌名を挙げれば、『Studio Voice』、『デザインの現場』、『広告批評』、『銀花』、『ハイファッション』、『エスクァイア日本版』、『マリ・クレール日本版』、『ぴあ』、『Lmagazine』と枚挙に暇が無い。上記の中には、神戸芸術工科大学図書館がこれまで購読してきた雑誌が多く含まれている。つまり、現実として、それだけの情報が図書館から無くなったことになる。幾つかの雑誌は、オンライン上では引き続き活動を続けているものもあるが、雑誌を受け入れて来た図書館が同名のウェブサイトの情報を定期的に収集し学生に情報提供しているわけではない。いささか唐突では

あるが、図書館が置かれた現状を仮に牧場に例えるなら、牧場の柵の中では牧草が減少しているが、柵の外では豊かな放牧地が果てしなく広がり続けている、といったところだろう。雑誌の休刊は紙媒体が衰退している一つの事例であり、それ自体熟考すべき問題であるが、本稿の目的は「柵の外」のほうにある。すなわち、始めからインターネット上に生成される情報の場合である。

2005 年にスタートしたスコット・シューマン (1968-) の「The Sartorialist」は、ストリートファッションスナップの分野で高い評価を得ているフォトブログである<sup>7)</sup>。スコットは世界各地でファッションナブルな人々を撮影し、それを日々ブログにアップする活動を 2005 年から始めている。2009 年になって書籍化されたが、プロジェクトは今も継続されており、彼のブログを訪れば、私たちは最近の日付の優れたファッションスナップを目にすることができる。彼のプロジェクトの基盤は、書籍ではなくあくまでもブログである。

よりラディカルな事例を挙げよう。ラファエル・ローゼンタール (1980-) は、ウェブサイトそれ自体を作品として制作するオランダの美術家である<sup>8)</sup>。彼の作品は生得的にインターネット上にのみ存在し、作品を閲覧するためには、PC とインターネット接続環境が不可欠である。サイトは売却後も常に一般公開された状態であり、個人が秘蔵することは出来ないようになっている。仮に美術館が彼の作品に価値を認め、コレクションに加えようとしても所蔵管理にはこれまでとは異なる保存修理の方法が要求されるだろう。この問題の対象を、美術館から図書館へと置き換えれば、いかなる状況が眼前に広がっているか理解できるだろう。

書籍の電子化ないし電子コンテンツの拡張は、図書館を否応無く変化の渦中へと引きずり込む。少なくとも電子情報への対応からは逃れる術がない。大学においても新たな情報プラットフォームが必要になるのは明白である。今後、私たちはどのような知の集積の「かたち」を考えることができるだろうか。

## 2. リニューアルに際しての課題

「アート&デザイン情報図書館」は、2008年12月に「新図書館ラボ」（図1）という名称で始まったことは既に述べたが、その名称が示す通り、設立当初の目的には、図書館それ自体についての情報収集が含まれていた。



図1 「新図書館ラボ」トップページ

「展覧会」と「講演会」についての情報が主要コンテンツであったが、図書館に関する情報を扱う「図書館ラボ」の項目が並列に扱われ、さらに、各学科生の自学自習に役立つ情報を記した「ウェブ検索術」、比較的自由的な内容を掲載できる「特集」の項目が設定されていた。「新図書館ラボ」は上記の5つのカテゴリーを有していたが、約1年半の運営期間を経るうちに、色々と不具合も確認された。「アート&デザイン情報図書館」の実際の構成についての説明は、次章に譲り、ここではリニューアルに向けて大枠で見えていた課題について語ることにする。

まず、大きな問題として挙げられるのは、「図書館ラボ」の項目の形骸化である。徐々に図書館関連記事が減少し、展覧会、講演会情報と同列に扱うことは難しくなっていた。この点は当初からある程度危惧していたことでもある。国立国会図書館が提供している「カレント・アウェアネス・ポータル」という非常に優れた図書館情報サイ

トが既にあり、図書館関係者の個人的な情報ブログも広く知られていた<sup>9)</sup>。その状況下にあつて、新たに同様のサービスを付け加えても、利用者の心を捉えるのは難しい。そもそも誰のための情報を第一義とするかを鑑みれば、図書館についての情報を集めるよりも、専門図書館としてデザインや美術に関する情報を収集することが重要であった。美術とデザイン専門の情報サイトとしての仕組みの強化を考え、より明確なメッセージを発するためのコンテンツ構成を検討することが課題となった。

更新頻度にも問題が見つかった。サイト開設直後は認知度も低いため、ユーザーを確保するためにはとにかく投稿回数を増やす必要があった。そこで「一日に4回投稿する」と規定していたが、時間が経つにつれ、この点にも問題が現れた。これは国内における展覧会の開催形態と関わるものである。公立の美術館の多くは、年4回の周期で展覧会を行っている。したがって、その「端境」の時期は、展覧会の告知が極端に減る。例えば、夏の展覧会は、6月頭頃から告知が始まり、早いところでは7月頭には夏期展覧会の会期が始まる。その後、小学校の夏休み期間一杯展覧会を続け、9月上旬に閉場となる。次回展覧会は、さらにその一週間ないし二週間後となる。そのため7月下旬から8月上旬にかけては極端にプレスリリースの数が減る。そのような時期には、投稿のための投稿作業に陥ることもあった。一日に記事を4つ投稿するという制約を解消することとした。

第三の課題としては、視覚情報の充実が挙げられる。アクセス数は順調に伸びていたが、他のポータルサイトと比べると設計上幾つかの制約があり、使い勝手の面でも問題があった。一番の課題は、画像を載せるための手間である。これはCMS自体に蓄積される画像のみならず、Amazonから表紙画像付きのリンクを貼る際にも同様の問題が生じていた。そのため、リニューアルに際してはCMSの変更を前提に検討した。「新図書館ラボ」で使用していたのは、海外では比較的使用が多いDrupalであったが、国内シェアが少なく日本語で利用できる追加機能の開発にも遅れが見えていた。そこでDrupal同様に無料で利用でき、様々な追加機能の開発が行われている

Wordpress への変更を決めた。CMS 決定に際し、最も大きな要因となったのは、神戸芸術工科大学のホームページが Wordpress で構築されていたことである。大学ホームページとの連携を考慮するならば、他の CMS よりは格段に取り回しが容易になる。現在、ウェブサイトのコンテンツはそのサイトのみで存在感を示すのではなく、様々な場所で「引用」されながら価値が強化されていく<sup>10)</sup>。新サイトの記事を大学ホームページ上にスムーズに掲載し、かつ将来的な連携の可能性を担保しようとするならば、選択肢は自ずと限られてくる。

また、iPhone 等のモバイル端末向けの表示に対応することも重要な案件であった。リニューアル作業に着手した当時は、Twitter の普及が急速に伸びていた時期である。ウェブ上のサービスを「ユーザーのポケットの中へ」と導いていく必要が認められた。この点は CMS 側が既に対処済みであったため、導入に際しての苦労はなかった。モバイル端末への対応は、現代の情報環境の中において、極めて重要な案件であった。これは次に挙げる課題と密接に関わる。

リニューアルに際し、図書（図書館）との連携の強化はぜひとも実現したい機能であった。展覧会情報、講演会情報のみでは、芸術系大学の情報プラットフォームとして片手落ちの感が否めない。大学という学術機関が有する最も膨大な情報群に関する情報提供、すなわち図書情報を加えてこそ、情報のハブとして機能しうる。「観る」ための展覧会情報、「聴く」ための講演会情報、そして「読む」ための図書情報が揃ってこそその情報プラットフォームである。また、図書情報とモバイル表示の組み合わせは、新たな可能性を呼び覚ます。多くの学生がモバイル端末を使用している現状で、本サイトから図書情報を入手できたとしたら、いかなることが可能になるだろうか。例えば、書店において自分が欲しいと思う本が大学図書館に所蔵されているかどうかを調べることもできるだろう。図書館内の書架の間から、検索端末の場所まで戻ることなく図書検索も可能になるだろう。リニューアルによって図書情報の提供とモバイル表示対応が実現すれば、現状に比べ、格段に利便性が向上することは明らかであっ

た。

以上が、リニューアルに際し、課題として把握された要件である。では次に、リニューアル後の情報プラットフォームの「かたち」を概観しよう。

### 3. 「アート&デザイン情報図書館」の構成

「アート&デザイン情報図書館」（図 2）のコンテンツは、大きく分けて「観る」「聴く」「読む」のそれぞれの行為を想定して作られている。



図 2) 「アート&デザイン情報図書館」トップページ

#### 1) 「観る」：展覧会情報

なぜ図書館を名乗るウェブサイトで展覧会の紹介なのか、と疑問に思う向きもあるだろうが、芸術・デザインの世界において、展覧会は最先端の結果が示されるメディアである。芸術系大学の学生に限ったことではないが、「知」とは文字情報のみにあるのではない。ただし、芸術系大学においてはとりわけ視覚情報が重視される。この点は、ファッションデザインやプロダクトデザインの領域において顕著である。最新の成果は、服飾であれば世界四大コレクション、家具や雑貨であればミラノサローネやメゾン・エ・オブジェなどの国際見本市で発表される<sup>11)</sup>。国内であれば、秋に開催される東京ガールコレクションや DESIGN TIDE TOKYO において各デザイナー

一の力作を目にすることができる<sup>12)</sup>。現代美術についても各ギャラリーが常に新作を紹介していることは改めて指摘するまでもない。また新作に限らず、多くの作品を組み合わせ、キュレーターが自らの世界観を世に問う形の展覧会であれば、そこには必ず「新しい視点」が含まれる。そこで示される「世界の見方」に、時代性や社会的課題が反映されていることも珍しくない。例えば、東京都現代美術館で2007年に開催された「SPACE FOR YOUR FUTURE: アートとデザインの遺伝子を組み替える」は、アート、ファッション、建築、デザインの各分野を超えて活躍する13ヶ国34アーティスト、デザイナーが提案する未来のコミュニケーション・スペースを考察する内容であり、建築、プロダクトデザイン、グラフィックデザインの各領域が参照すべき内容となっていた<sup>13)</sup>。また、21\_21 DESIGN SIGHTで2007年に開催された「Water展」は今後起こり得る課題として水資源をテーマとし、優れた出展作品を通じて関心を引き起こすことに成功している<sup>14)</sup>。やはり、21\_21 DESIGN SIGHTで2010年に行われた「ポスト・フォッシル: 未来のデザイン発掘」は、トレンド予測の第一人者リー・エデルコートのディレクションにより、現在のヨーロッパにおけるプロダクトデザインの潮流を鮮やかに提示して見せた<sup>15)</sup>。その他にも「スキン+ボーンズ-1980年代以降の建築とファッション」（国立新美術館、2007年）や「医学と芸術展」（森美術館、2009年）などの優れた企画を挙げるができる。これらの展覧会では、学生はキュレーターの視点を拠り所としながら、現在考えるべき課題を把握することができる。この意味において、展覧会は、芸術系大学の学生にとって専門領域における知を伝達する装置(メディア)として多大なる役割を担っているのである。図書館に限らず、芸術系大学において、この種の情報支援は今まで統合的な形では行われてこなかった。伝統的には学生の自助努力に負ってきた部分であろうが、芸術系大学の情報プラットフォームを考える上では考慮すべき対象と位置付けたい。

さて、一日に4記事を投稿するという目標は、リニューアルとともに撤回されているが、それでも一ヶ月間に

60件近くの展覧会を紹介することには変わりはない。以前から度々指摘されていたのが、「過去に紹介した展覧会がいつ終わるかわかりにくい」という点であった。確かに気をつけていないと「見逃し」が起こる。そこで、対応策として「もうすぐ終了」（図3）という項目を設けることにした。これは、あらかじめ設定しておいた会期終了日一週間前になると自動的に記事が「もうすぐ終了」の項目に表示されるという仕組みである。これまでは筆者が終了間近になるとTwitterで告知をしていたが、この機能を実装したことによって、サイトを訪れたユーザーは終了間際の展覧会を自らチェックできるようになった。

#### もうすぐ終了

- [~2011年07月24日]  
壺山人の宇宙展…とちぎ蔵の街美術館
- [~2011年07月28日]  
2011 ADC展…ギンザ・グラフィック・ギャラリー、クリエイションギャラリーG8
- [~2011年07月24日]  
カレル・ゼマン展 トリック映画の前衛-チェコ・アニメ もうひとりの巨匠…渋谷区立松濤美術館

図3) 「もうすぐ終了」の表示

同様に、展覧会に関するものに「注目のイベント」（図4）がある。ここは編集を担当している筆者が特に勧める展覧会を6つ紹介する場所となっている。展覧会选择の際には、デザイン史、美術史的に重要な展覧会で学生の今後の制作の参考になりそうなものを紹介することになっている。「注目のイベント」を設けたことで、これまでタイムラインに沿って展覧会が日々更新されていくだけだった展覧会情報に、別の視点からの編集を加えられるようになった。筆者は、こうした編集能力が情報プラットフォームの運営のみならず、今後の図書館像においても重要な論点になると認識しているが、この点は本稿の最後に改めて指摘することとする。



図4) 「注目イベント」の表示

2) 「聴く」：講演会、公開講座情報

近年、大学は地域社会への貢献の意味もあり、公開講座や特別講義の開講、研究者と住民の交流の場となるサイエンスカフェのような取り組みを頻繁に行っている。芸術系大学においてもこの流れと無関係ではなく、各大学が著名なデザイナーや旬のアーティストらを招聘し、その多くは誰もが無料で聴講することができる。大阪、京都など神戸の近隣都市には芸術系学科を有する大学がいくつもある。一般開放され、聴講無料の公開講座や特別講義は、他大学の主催であっても非常に優れた教育機会となるはずである。そのため、本学開講の講座はもちろん、他大学の講座も取り上げている。他人の禪を借りるようではあるが、公開講座等の情報をこれまで集約する場所がなかったのも事実である。今回は、さらに一歩進めて、展覧会の関連講演会の情報も紹介することにした。ただし、公開講座と同列に扱うことは避けている。なぜなら、展覧会の関連講演会はほぼ毎週土日に集中的に開催され、かつサイトで紹介している展覧会が月に60件程度に上ることから、講演会の情報量が膨れ上がって

しまう。したがって、別途「イベントカレンダー」（図5）という項目を設けて、そちらを紹介の場とした。カテゴリである「講演会」との棲み分けを言えば、大学の公開講座や単独の講演会は通常の投稿記事として掲載し、展覧会の関連講演会は「イベントカレンダー」のみの掲載と区別している。ただし、関連講演会でも特に重要と認められるものに関しては、柔軟に対応している。



図5) 「イベントカレンダー」の表示

3) 「読む」：図書検索機能

今回のリニューアルにおいて新たに組み込まれたのが、図書検索機能である。「新図書館ラボ」から「アート&デザイン情報図書館」と名称を変更した理由は、今回のリニューアルにおいて充実した図書関連機能を実装できたことと関係が深い。



図6) 「図書館の本を探す」の表示

「アート&デザイン情報図書館」にはサイト右側に「図書館の本を探す」という項目があり、「KDU 検索」と「全

国図書館検索」と書かれた検索ボックスが設定されている（図6）。「KDU検索」は、神戸芸術工科大学図書館のOPACに対する検索であるが、図書館ホームページと異なり、「アート&デザイン情報図書館」のトップページははじめほぼ全てのページからキーワード検索が可能となっている。これは蔵書検索の際、単語入力までのクリック回数を減らすことはもちろん、サイト左側に表示される展覧会、講演会情報で見つけたキーワードをすぐにサイト右側にて検索できることを狙ったことである。これにより、出展作家名や講演者名を検索する際に、再度タブを立ち上げたり、サイト間を移動したりしなくて済むという利点が生まれた。なぜこの表示形式にこだわったかということ、展覧会を観ること、講演会を聴くこと、が情報検索の動機付けとしてはかなりの強度を有していると捉えているためである。展覧会や講演会に行く前に気になる用語を調べておくことはもちろん、展覧会や講演会に足を運んだら、その後内容を読書で補う、という行為を想定した。

書籍と展覧会情報の関連付けに関しては、武蔵野美術大学美術館・図書館が開発した「ブックタッチ」が類似例として挙げられる。ただし、「ブックタッチ」と「アート&デザイン情報図書館」の図書検索機能は発想のベクトルとしては逆である。

「ブックタッチ」は、武蔵野美術大学美術館・図書館が図書館新棟の建設に際し、新たに構築した情報検索システムである。所蔵図書を端末にかざすと、その図書の書誌情報や配架エリアのほか、「学科別貸出履歴」や「関連図書」などの情報が表示される。さらに、かざした図書の分野に関連する首都圏近郊の展覧会情報を、提携先の展覧会情報サイトから入手できる優れた仕組みである<sup>16)</sup>。

「ブックタッチ」では、情報の流れとしては所蔵書籍から関連展覧会へと向けられている。対して、「アート&デザイン情報図書館」では展覧会情報に付随して、関連書籍を紹介することを念頭に置いている。日々流動していく展覧会情報に含まれる作家名や展覧会のキーワードを拾い上げて検索する、あるいは、講演会で気になった言葉や講演者の活動を関連書籍にあたるなど、日々もたらさ

れる情報に書籍を関連させようというのがその意図である。「アート&デザイン情報図書館」の検索は「ブックタッチ」のように端末にかざして情報を得るという仕組みではないので同列に論じることはできないが、このベクトルの差は、書籍を主体に情報を組み立てるか、展覧会・講演会を主体に情報を組み立てるかで生じた違いであろう。ただ、「ブックタッチ」がバーコード認識を必要とする以上、検索端末に依存するのに対し、「アート&デザイン情報図書館」はインターネット接続環境があれば通常のPC、モバイル機器から検索が行えるのは利点である。特定の機種に依存しないということは、図書館の検索端末コーナーから解放されているということであり、将来的に図書館空間にも影響を与えると予測できる。スマートフォンを通じて書架と書架の間から検索できることは、図書館の平米数が増えればより重要な課題になるだろう。ただ、この点は本稿の論点から離れるのでこれ以上の記述は控える。

さて、もう一つの検索ボックス「全国図書館検索」に話を戻そう。神戸芸術工科大学図書館の蔵書検索である「KDU検索」とは異なり、こちらは全国の図書館から書籍を探せるサービス「カーリル」（図7）を活用したものである<sup>17)</sup>。



図7 「カーリル」（全国図書館検索）の表示結果

「カーリル」は、全国の公共図書館、大学図書館の横断検索サービスであり、webcatとAmazonを統合したような機能を持つ。webcatは全国の大学図書館等が所蔵する図書・雑誌の総合目録データベースを検索できる仕組みだが、「カーリル」では全国の公共図書館も対象となっている。キーワードを入力すると、予め設定しておいた「お気に入りの図書館」から検索語句に該当する書籍とその所蔵館を表紙画像付きで表示してくれる。さらに関連書籍の表示のほか、その本が貸出し可能かどうか、さらにはAmazonの購入ページへのリンクまで対応している（図8）。



図8) カーリルによる検索結果の詳細表示画面

「アート&デザイン情報図書館」は神戸、関西圏に限らず全国の展覧会情報を扱っているため、利用者も全国各地にいる。展覧会に関連した書籍を図書館で見つけようとする時、それぞれが住んでいる地域の図書館、近くの図書館を設定しておくことができる「カーリル」は、極めて有益な存在である。もちろん、第一の想定利用者層である本学学生にとっても、自宅近くの図書館の蔵書を併せて検索してくれる同サービスは機能的である。

上記の蔵書検索機能の強化のほか、今回のリニューアルでは、書籍を積極的に紹介することにも取り組んでい

る。サイト右側の「図書館の新着図書から」「Amazon」の項目がそれに当る（図9）。蔵書検索は、自らの興味関心に従って投げかけたキーワードに関する結果であり、主体は利用者の側にある。逆に、こちらから本をお勧めすることも書籍との出会い方としては重要であろう。



図9) 「Amazon」「図書館の新着図書から」の表示

「図書館の新着図書」では、神戸芸術工科大学図書館の新着図書から、特にデザインや美術の専門領域に関連する書籍をピックアップして紹介している。選択して紹介する理由は、一つには、「アート&デザイン情報図書館」のユーザーは、展覧会・講演会に興味を持っていることを前提としていること、もう一つには、語学教材等、大学の基礎教科に関連するもの、PCソフトの操作マニュアルのような書籍は必要に迫られれば必然と手にとるものであり、学外に向けてまで紹介する意味は少ないとの考えに根ざしているためである。仮に全新着図書の告知が必要と判断されるなら、それは図書館のホームページで検討すべきものである。この新着図書の紹介にも、書籍

の表紙が表示される等の利点により、前述の「カーリル」を活用している。他大学図書館の事例をみても、図書館新着図書情報を書籍の表紙付きで紹介している事例は管見の限り見当たらない。本サイトの優れた特徴の一つである。

今回のリニューアルにより Amazon の表紙表示に対応したことで、さらに新しい取り組みも可能となった。「Amazon」の項目にある「アート&デザイン参考図書／大学出版物／新刊案内」（図 10）である。



図 10) 「アート&デザイン参考図書／大学出版物／新刊案内」の表示

大学出版物は神戸芸術工科大学が関わって出版された書籍、新刊案内は、本学の各学科に関連する書籍の文字通りの新刊情報であるから、特に説明は不要であろう。ここでは「アート&デザイン参考図書」についてのみ解説する。参考図書とは、特定の事項について調べるための資料で、辞書や白書などのように必要に応じて事項に当

るための書籍である。したがって、「アート&デザイン参考図書」でもデザインや美術の領域において辞典のように必要に応じて項目から探せるような書籍を紹介している。一例を挙げるならば、『フォントブック和文基本書体編』<sup>18)</sup>、『the front line of fashion 日本のファッションデザイナー100』<sup>19)</sup>、『世界の、アーティスト・イン・レジデンスから』<sup>20)</sup> などである。通常、これらの書籍は、図書館業界において参考図書として認識されているとは言い難いが、参考図書として活用が見込める書籍は積極的に紹介している。Amazon に登録されている書籍に限定されるという課題は残るが、今日、多くの書籍が Amazon を経由して流通している以上、さほど深刻な問題と捉えることもあるまい。

#### 4) その他の変更点

「アート&デザイン情報図書館」の上部に表示しているカテゴリには「展覧会」「講演会」のほか、「etc...」、すなわち「その他」の項目がある。文字通り、展覧会や講演会からはやや外れる内容を掲載するための場所として準備した。以前の「新図書館ラボ」における「特集」に近い項目である。人気記事である「全国卒展スケジュール」、神戸芸術工科大学の卒展写真特集などが「その他」に分類されている。サイト右側下部に設けられた「図書館 R&D」は、以前「図書館ラボ」としてサイト上部に表示されていた。しかし現在は図書館ニュース等の記事を排し、自主開催研究会の告知と開催報告のみを掲載している。

2010年10月のリニューアルからはやや時が経ったが、2011年4月に新たなコンテンツとして「関西ギャラリーマップ」（図 11）を追加した。神戸、大阪、京都を中心に、関西圏のギャラリーで開催される展覧会をコンテンツ化したものである。



図 11) 「関西ギャラリーマップ」の表示

これまでギャラリーからはプレスリリースやダイレクトメールが送られてきていたが、美術館のプレスリリースほど、展示内容についての記述があるわけではなく、美術館の展覧会と同列に紹介することが難しかった。また展覧会の頻度も美術館に比べて早い。短いものでは一週間、通常は二週間程度である。これらを情報登録して処理するためには、投稿日時により掲載順が決まるブログ形式では見難くなることが予想された。したがって、タイムライン形式で情報が表示されることが求められた。この「関西ギャラリーマップ」には、マサチューセッツ工科大学が提供しているシステムを用いている<sup>21)</sup>。左にタイムライン、右に地図が表示されるほか、下部に各ギャラリーのホームページへのリンクが貼られている。紹介するギャラリーの数が増えれば、次第に関西圏のギャラリーリンク集として成長していく特性がある。

以上が、ウェブサイトとしての「アート&デザイン情報図書館」の各機能である。しかし、情報プラットフォームとしての「アート&デザイン情報図書館」は、さらにいくつかの機能が組み合わされることによって成り立っている。以下にその点について解説しよう。

#### 4. 情報プラットフォームとしての活動

##### 1) Twitter での関連情報提供

ウェブサイト、すなわち Wordpress という CMS 上で展開される活動の他に、「アート&デザイン情報図書館」の活動を形作っているものが、Twitter というミニブログに設けられたアカウントである（図 12）<sup>22)</sup>。



図 12) twitter での情報提供

ここでは、美術館や展覧会、イベント、新製品発表等に関するウェブ上の記事の集約と提供が行われている。試みに最近紹介した幾つかの記事を参照するなら、「韓国デザイナーの「ハーフチェア」...デザイン巨匠を魅了」（中央日報、6月17日付）、「震災で閉館の諸橋近代美術館、25日再開館」（KFB 福島放送、6月17日付）、「東北芸工大と京都造形大 来春に法人統合」（朝日新聞、6月16日付）、「ジャンポール・ゴルチエの展覧会、モントリオールで開催」（AFP 通信、6月16日付）などが挙げられる。国内外の展覧会のレビュー、プレビュー、各デザイン領域におけるニュース、芸術系大学の動向など、1日10件程度の「つぶやき」を毎日行っている。本体であるウェブサイトと与える影響も大きく、「アート&デザイン情報図書館」の利用者のうち、約5%はTwitter 経由のアクセスであり、これらの利用者は、ページ閲覧

数、サイト滞在時間、直帰率のいずれにおいても他の利用者よりも優れた数値を示している<sup>23)</sup>。Twitter というフィルターを経由して訪れる者は、より強い動機付けの上で本サイトを利用しているとみることができる。参考までに記しておく、本稿執筆時のフォロワー数（読者数）は約 4000 人である。なお、前述の「イベントカレンダー」と「もうすぐ終了」の二つの機能に関しては、Twitter からのフィードバックに基づき、構想されたものである。元々、終了間近の展覧会は、Twitter で一つ一つ紹介していたが、多い時は一日に 20 件近くに上る事から、自動化が望まれていた。「イベントカレンダー」も同様に、リツイート（引用）の件数などからリマインダーの必要性が確認できたため、実装するに至った。読者の動向を注視し、「アート&デザイン情報図書館」の仕様に反映させたという意味で、Twitter はリニューアルに際し、マーケティングツールとして機能したといえるだろう。

## 2) 展覧会情報・フライヤーのアーカイブ

「新図書館ラボ」から「アート&デザイン情報図書館」へのリニューアル作業において重視されたのは、「視覚情報の強化」であったことは既に述べた。この点は、フライヤー、すなわち展覧会のチラシにとってはまた別の意味を含むものである。まず確認しておかなければならないのは、CMS とはデータベースであり、基本的にアーカイブとしての性質を有しているという点である。私たちはウェブサイト語る際に「更新」という表現を用いるが、CMS においてはデータが新たにデータベースに追加されるので、「格納」という表現のほうが適切かもしれない。実のところ、展覧会情報の日々の投稿は情報の発信と同時に情報を蓄積する行為でもある。展覧会を紹介するという事は、展覧会情報のアーカイブを日々作っているに等しい。展覧会名、会期、休館日、時間、会場、入館料、その時のウェブサイトに書かれていた告知文等々の情報が逐一「アート&デザイン情報図書館」には溜まっていく。リニューアルによって、そこにフライヤーという視覚情報が追加された。「アート&デザイン情報図書館」

にアクセスして、フライヤーにマウスのカーソルを合わせると、そこに「IMG\_?????」という番号が表示されることに気付くだろう。これがフライヤーの現物資料の登録番号を兼ねている。筆者は過去 3 年間に渡って、展覧会のフライヤーを収集してきた。それらはグラフィックデザイン領域における一次資料であり、展覧会にとっての二次資料としての価値を有している。グラフィックデザインの各年鑑を調べれば、誰がどのフライヤーをデザインしたのか、ある程度の調べがつく。そこから、デザイナー毎の分類も可能となる。未公開ではあるが、既にデザイナー名でフライヤーを検索する仕組みを組み込んでいる。リニューアル後は、希望者に対するフライヤーの閲覧も情報プラットフォームとしての「アート&デザイン情報図書館」の活動と位置づけた。CMS が現物資料の管理ツールとしても機能しているのである。

なお、アーカイブとしての性格という点で説明を補足すると、前述の Twitter による美術・デザイン関係のニュース記事は本体のウェブサイトには掲載していない。インターネットに掲載される新聞記事は、ある一定の間を過ぎると読むことができなくなるため、アーカイブとして保存し続けることができない。ウェブサイトの表示をそのまま保存するクリッピングツールを使えば収集すること自体は可能だが、その公開には著作権というまた別の問題が発生する。

## 3) レファレンス・サービス

次に独自の試みであるレファレンス・サービスについて記しておく。筆者は情報プラットフォームとしての「アート&デザイン情報図書館」の運営を担い、展覧会情報を日々扱っている。関西圏の美術館、ギャラリーに限らず、全国に足を運び、年間に相当数の展覧会を観ている。これらの活動を背景に、展覧会のチラシ、プレスリリースの作成支援、あるいはギャラリーの紹介などを今回のリニューアルに合わせて実施することとした。具体的にはサービス開始の告知をサイトに掲載しているに過ぎないが、展覧会情報の専門家として「展覧会をやりたい」「チラシにどんな情報をのせたらよいか相談したい」という声

に対応しようというのが狙いである。書籍やデータベースに明るいことが司書の条件であるならば、芸術・デザインを専門に扱う情報プラットフォームの「司書」的サービスを実験してみようということである。専門家に相談できることも情報プラットフォームの無視できない活動であろう。

以上、みてきたような活動の総体が、情報プラットフォームとしての「アート&デザイン情報図書館」の全容である。「観る」、「聴く」、「読む」、それぞれの情報を提供し、かつ展覧会情報やフライヤーのデータベースとしても機能すること、関連情報に関するプロフェッショナルとして様々なアドバイスに対応できること、が芸術系大学の情報プラットフォームの活動として現在実践されている。

#### 4) 無料サービスによる構築

コンテンツ構成からは外れるが、最後に構築・運営コストの問題にも触れておきたい。前述の教育支援を、全て無料のサービスを用いて構築している点が、本情報プラットフォームの一つの特徴である。基本的に目に見えた利益を生み出さない公的機関のウェブサイトにとって、コストの問題は重要である。これまで外部のレンタルサーバーを使用してきたが、リニューアルを契機にサーバーを大学がホームページ運営用に使用しているものに変更した。また、外部に委託していた構築作業を学内の人材で対応することで、年間のシステム維持管理費を無料にすることができた。経費削減の考えは、必要な機能を全て無料で提供されている既存のサービスの活用によって実現されている点にも表れている。核となるCMSにも無料配布のWordPressを採用していることは既に述べた。Amazonの書籍紹介は同社のアフェリエイト・サービスにより実現され、「イベントカレンダー」はGoogleが無料で配布している仕組みである。「全国図書館検索」や「関西ギャラリーマップ」も「カーリル」等の無料サービスによって実現した。「構築コスト0円」はリニューアル時に目標の一つに掲げていたが、それはなぜ必要なのか。

情報プラットフォームは、本来、継続的な運営が約束

されていなければならない。構築して翌日からいきなり充実した情報収集および提供の体系を実践できる訳ではなく、図書館がそうであるように、情報の蓄積がなされていく過程で自ずと、情報の経由がなされ、他者の情報体系の中に組み込まれるようになる。長期的な作業が不可避である。その意味では維持管理にかかる費用はできる限り安いに越したことはない。これが一つ目の理由である。もう一つには、構築に際し、無料サービスを活用するということは、他の機関も同様の仕組みを無料で構築することが可能になるということである。図書館の情報収集や提供、情報化対応は、どの機関も同じ課題をもっているといつてよい。美術館内にある図書室、ミュージアムライブラリーも同様である。第2章で指摘したように情報の電子化が進めば、近い将来、地域のアート情報のアーカイブと配信が役割として求められる日が訪れるかも知れない。しかし、現在の苦しい予算状況を鑑みれば、企業が販売している高額なシステムを導入することは難しい。その時に、人件費以外は基本無料で設置可能な仕組みとノウハウを提供できれば、導入までのバリアが下がると考えている。少なくとも予算的な課題に足を取られることはないだろう。現に、公式、非公式問わず、多くの美術館や博物館が無料のブログやSNSを活用している。ただし、いつ終了の通知が来るかわからないサービスに頼ることは、情報プラットフォームの安定的な運営にとって障害となる。その時の「旬な」サービスを最大限活用することは悪いことではないが、情報を自前で格納するための仕組みを保持しておくことは情報の危機管理を考える上でも重要なことだろう。したがって、「アート&デザイン情報図書館」はCMSに無料サービスを組み合わせて構築している。その構築ノウハウが他の文化施設から求められることがあれば、研究の社会還元として現状の「アート&デザイン情報図書館」のシステムを無料で提供することに躊躇いはない。

#### 5. Curatorialな情報空間の構築

本稿を結ぶにあたって、情報プラットフォームの構築を通して見えてきた幾つかの点から、今後の図書館の在

り方について示唆しておきたい。

一つには、現状において情報プラットフォームはオンラインサービスのみでは完結しないという点が挙げられる。現実の書籍とウェブ上のコンテンツの双方が欠けても、情報支援サービスとしては片手落ちである。リニューアルにおいて図書検索機能との連携を図ったように、膨大な蔵書を抱える肝心の図書館との統合的なサービスを構築しない限り、オンライン上の情報をいくら集めても、学生には魅力的なツールとして映らないだろう。レファレンス・サービスなどオフラインの活動に着手した理由もここにある。現代の情報環境においては、書籍とウェブ上の情報の双方があってはじめて充実した教育研究支援が可能となる。今回構築された「アート&デザイン情報図書館」は、既存の図書館のアップデートの中に位置づけられて、初めてその真価を発揮することだろう。

もう一つ重要な点は、情報との出会い方である。情報プラットフォームとしての「アート&デザイン情報図書館」の活動は、基本的に情報を「勧める」ことで成り立っている。掲載される展覧会や講演会、インターネット上の各記事は選択を経て紹介されている。利用者がキーワードを入力し、目的の情報に辿り着く検索行動とは異なり、利用者の意図に関わらずこちら側から情報がもたらされる状態である。そこに一定の価値が認められれば、サイトの利用者は増加する。そのためには編集軸を明確にし、独自性を高める工夫が必要となる。このことを図書館に当てはめて考えてみると、検索によって書籍に線的に辿り着くのではなく、図書の特集陳列に似て、こちら側からのアプローチで情報と出会う場を整えるということである。文字がデジタル化され、書物という容器から引き剥がされた現在、知の物理的な蓄積の場にも変化が認められる。学習空間としての充実を図るラーニング・コモンズ、ギャラリー併設等による施設複合化など、幾つかの取り組みが既にあるが、多くは「情報の集積」というこれまで図書館を特徴付けてきた事象に対する再考にまでは至っていない。問われているのは、持つことの意義が薄れつつあるなかで、持つことの価値をどう示せるかである。そのためには、学芸員が展覧会のために出

展作品を吟味するように、より積極的に視点を提示していくことが必要であろう。いくなれば、「キュラトリアルな (Curatorial)」な図書館空間という発想である<sup>24)</sup>。もちろん蔵書の充実と検索可能性の担保は、これまでと変わらず重要であり、その価値はいささかも減じることはないが、集積した情報に対する編集責任と個々の情報の重みを再確認するための仕組みとして、「アート&デザイン情報図書館」が行っているような情報の選択的提示が現実の図書館において強化されるなら、新たな地平を開くことができるはずである。

おわりに

本稿では、芸術系大学における情報プラットフォーム構築の実践的な研究の場である「アート&デザイン情報図書館」の趣旨と諸機能について詳述するよう努めてきた。結果として、変化する現代の情報環境において、オンラインも含めた情報プラットフォームの構築は急務であり、「アート&デザイン情報図書館」は、その一つの回答と位置づけられることは示唆されたものと思う。

情報プラットフォームとしての「アート&デザイン情報図書館」は、最新の成果が公開されるメディアとしての展覧会を主たるコンテンツに据え、特別講義や公開講座、さらには関連の専門図書の情報を集約し、広く一般に公開されている。また展覧会、イベント、新製品発表等に関するウェブ上のニュース記事の収集も同時に行われている。図書館の新作図書を表紙画像付きで配信する仕組みや「関西ギャラリーマップ」など実験的な要素を折り込みつつ、「観る」、「聴く」、「読む」のそれぞれの領域において実現された教育支援は、従来の図書館の範囲を大きく超えるとともに、情報の編集を積極的に行うキュラトリアルな実践であった。

今後は、現実の図書館空間との関連においてオンライン情報プラットフォームがどのように機能しうるのか、あるいは情報プラットフォームの構築実験によってその端緒をつかむこととなった「キュラトリアルな (Curatorial)」な図書館空間をどのように実現していくのかについての考察が必要となるであろう。その点につ

いては後稿を俟ちたい。

註

- 1) 大英図書館  
<http://pressandpolicy.bl.uk/Press-Releases/The-British-Library-and-Google-to-make-250-000-books-available-to-all-4fc.aspx>
- 2) 朝日新聞  
<http://www.asahi.com/culture/update/0426/TKY201104260511.html>
- 3) Europeana <http://www.europeana.eu/portal/>
- 4) Internet Archive <http://www.archive.org/>
- 5) 国立国会図書館  
[http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/internet\\_data.html](http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/internet_data.html)
- 6) デイドロ、ダランペール編（桑原武夫訳編）『百科全書—序論および代表項目—』岩波書店,1971,p.138.
- 7) The Sartorialist  
<http://www.thesartorialist.blogspot.com/>
- 8) Rafaël Rozendaal  
<http://www.gloriamariagallery.com/>
- 9) カレントアウェアネス・ポータル  
<http://current.ndl.go.jp/>
- 10) サイトのリニューアル後は、タグに「神戸芸術工科大学」がつく記事は大学 HP トップページにフィードされるようになっている。
- 11) 世界4大コレクションとは、ニューヨーク・ロンドン・ミラノ・パリで開催されるプレタポルテの各ファッションショーを指す。ミラノサローネ（Salone Internazionale del Mobile）およびメゾン・エ・オブジェ（MAISON&OBJET）は国際的見本市であり、最新の家具や雑貨が発表される。
- 12) 東京ガールズコレクションは2005年に開始されたリアル・クローズのファッションショーである。DESIGN TIDE TOKYO も2005年開始の家具を中心とした展示会である。
- 13) 会期：2007年10月27日（土）～2008年1月20日（日）会場：東京都現代美術館
- 14) 会期：2007年10月5日（金）～2008年1月14日（月）会場：21\_21 DESIGN SIGHT
- 15) 会期：2010年4月24日（土）～6月27日（日）会場：21\_21 DESIGN SIGHT
- 16) 武蔵野美術大学美術館・図書館の「ブックタッチ」は、展覧会情報サイト「東京アートビート」と連携している。<http://www.tokyoartbeat.com/>
- 17) <http://calil.jp/>
- 18) 祖父江慎編著『フォントブック 和文基本書体編』毎日コミュニケーションズ,2008.
- 19) 『the front line of fashion 日本のファッションデザイナー100』ビー・エヌ・エヌ新社,2009.

- 20) サムワズガーデン監修『世界の、アーティスト・イン・レジデンスから』ビー・エヌ・エヌ新社,2009.
- 21) オープンソースのプロジェクトである SIMILE のウィジェット「Timeline」が用いられている。  
<http://www.simile-widgets.org/timeline/>
- 22) Twitter <http://twitter.com/#!/kduliblab>
- 23) Google Analytics によると、2011年6月21日～7月21日の期間における twitter 経由のトラフィックは6.33%である。
- 24) 「キュラトリアル」な図書館空間、「キュラトリアル・ライブラリー（Curatorial Library）」とは、一人ないし数名のディレクター（司書）が、自らの世界観に基づき、書籍、web コンテンツ、製品を対象に情報を蒐集／編集し、適切な形態で利用者に提示する空間と捉えている。そこでは、検索に基づく貸出や閲覧ではなく、ディレクターの眼によって選び出された世界の切り口たる情報に触れることができ、展示は美術展同様に定期的に再編集される。そこにおける司書の主たる活動は己の現状認識をもって世界と利用者をつなぐことにある。本稿の目的は、「アート&デザイン情報図書館」の理念および諸機能についての解説であるから、「キュラトリアル・ライブラリー」それ自体の考察については控える。

上記 URL はいずれも 2011 年 7 月 21 日確認。

図版出典

- 1) <http://shintoshokanlab.kobe-du.ac.jp/>（撮影日：2011/09/14）
- 2) <http://infolib.kobe-du.ac.jp/>（撮影日：2011/06/26）
- 3) 同上（撮影日：2011/07/21）
- 4) 同上（撮影日：2011/07/21）
- 5) 同上（撮影日：2011/07/21）
- 6) 同上（撮影日：2011/07/21）
- 7) <http://calil.jp/>（撮影日：2011/06/18）
- 8) 同上（撮影日：2011/06/18）
- 9) <http://infolib.kobe-du.ac.jp/>（撮影日：2011/07/21）
- 10) <http://infolib.kobe-du.ac.jp/amazon/>（撮影日：2011/06/18）
- 11) <http://infolib.kobe-du.ac.jp/kansaigallerymap/>（撮影日：2011/06/26）
- 12) <http://twitter.com/kduliblab>（撮影日：2011/06/26）